

帰り道

森 絵都 作
スカイエマ 絵



1 放課後のさわがしい玄関口で、いきなり、周也から「よっ。」と声をかけられて、どきっとした。

「あれ。周也、野球の練習は。」

「今日はなし。かんとく、急用だって。」

2 うわばきをぬぎながら周也が言って、くつしたにぽっかり空いた穴から、やんちゃそうな親指をのぞかせた。その指をスニーカーにおさめても、周也はなかなか歩きたそうとしない。どうやら、いっしょに帰る気のようにだ。

3 小四から同じクラスの周也。家も近いから、周也が野球チームに入るまでは、よくいっしょに登下校をしていた。なのに、今日のぼくには、周也と二人きりの帰り道が、はてしなく遠く感じられる。

4 もたもたとくつをはきかえて外へ出ると、五月の空はまだ明るく、グラウンドに舞う砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。

「ああ、腹へった。今日の夕飯、何かなあ。あしたの給食、何かなあ。」

「な、律。昨日の野球、見たか。」

「夏休みまで、あと何日だったっけ。」

5 周也の話があちこち飛ぶのは、いつものこと。なのに、今日のぼくにはついていけない。まるでなんにもなかったみたいに、周也はふだんと変わらない。ぼくだけがあのことを引きずっているみたいで、一步前に行く紺色のパーカーが、どんどんにくらしく見えてくる。

6 今日の昼休み、友達五人でしゃべっているうちに、「どっちが好き。」って話になった。「海と山は。」「夏と冬は。」「ラーメンとカレーは。」「歯ブラシのかたいのと

○視点

○穴

○砂ぼこり
○腹

やわらかいのは。——みんなで順に質問を出し合い、「海」「海」「山」「海」と、ぼんぼん答えていく。そのテンポに、ぼくだけついていけなかった。「どっちかなあ」とか、「どっちもかな」とか、一人でごによごによ言っていたら、周也が急にいらついた目でぼくをにらんだんだ。

「どっちも好きってのは、どっちも好きじゃないのと、いっしょじゃないの。」

7 先のとがったするどいものが、みぞおちの辺りにずきつとささった。そんな気がした。そのまま今もささり続けて、歩いて、歩いて、ふり落とせない。

8 返事をしないぼくに白けたのか、周也の口数もしだいに減って、大通りの歩道橋をわたるころには、二人してすっかりだまりこんでいた。階段をのぼる周也と、ぼくとの間に、きよりが開く。広がる。ここ一年でぐんと高くなった頭の位置。たくましくなった足どり。ぼくより半年早く生まれた周也は、これからもずっと、どんなこともテンポよく乗りこえて、ぐんぐん前へ進んでいくんだろう。

9 はあ。声にならないため息が、ぼくの口からこぼれて、足元のかげにとけていく。どうして、ぼく、すぐに立ち止まっちゃうんだろう。思っていることが、

なんて言えないんだろう。ぼくは海のこんなところが好きだ。山のこんなところも好きだ。その「こんな」をうまく言葉にできたなら、周也とちゃんとかたを並べて、歩いていけるのかな。「どっちも好き」と「どっちも好きじゃない」がいっしょなら、「言えなかったこと」と「なかったこと」もいっしょになっちゃうのかな。考えるほどに、みぞおちの辺りが重くなる。

10 市立公園内の遊歩道にさしかかったころには、ぼくは周也に三歩以上もおくれをとっていた。もうだめだ。追いつけない。あきらめの境地でぼくは天をおいだ。信じがたいものを見たのは、そのときだった。



階段

並べる



11 空一面からシャワーの水が降ってきた。

12 もちろん、そんなわけはない。なのに、なぜだかどっさにプールの後に浴びるシャワーがうかんだのは、公園の新緑がふりまく初夏のにおいのせいかもしれない。

「うおっ。」

「何これ。」

13 頭に、顔に、体中に打ちつける水滴てきを雨と認めるのには、少し時間がかかった。晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。ぼくと周也はむやみにじたばたし、意味もなくとんだりはねたりして、またたく間に天気雨が通り過ぎていくと、たがいのぬれた頭を指さし合って笑った。

14 本当に、あつというまのことだったんだ。ぎざつと水が降ってきて、何かを洗い流した。周也の気どった前がみがべたつとなったのがゆかいて、ぼくはさんざん腹をかかえ、気がつくと、みぞおちの異物が消えてきた。

15 単純すぎる自分はずかしくなったのは、笑いの大波が引いてからだ。うっかり

10

5

○降ふる

○初はつ夏か

○認をめる

○洗をい流す

○異い物

○単たん純じゆん

はしゃいだばつの悪さをかくすように、ぼくはすっと目をふせた。アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。そのまぶしさに背中をおされるように、今だ、と思った。今、言わなきゃ、きつと二度と言えない。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」

16 勇気をふりしぼったわりには、しどろもどろのたよりない声が出た。

「ほんとに両方、好きなんだ。」

17 周也はしばしまばたきを止めて、まじまじとぼくの顔を見つめ、それから、こっくりうなずいた。周也にしてはめずらしく言葉がない。なのに、分かってもらえた気がした。

「行こっか。」

「うん。」

18 ぬれた地面にさつきよりも軽快な足音をきぎんで、ぼくたちはまた歩きだした。

2

19 何もなかったみたいにふるまえば、何もなかったことになる。そんなあまい考えをすてたのは、校門を出てから数分後、最初の角を曲がった辺りだった。どんなに必死で話題をふっても、律はうんともすんとも言わない。背中に感じる気配は冷たくなるばかり。やっぱり、律はおこってるんだ。そりゃそうだ。

20 昼休み、みんなで話をしていたとき、はつきりしない律にじりじりして、つい、言わなくてもいいことを言った。軽くつつこんだつもりが、律の顔を見て、重くひびいてしまったのが分かった。まずい、と思うも、もうおそい。以降、絶対にぼくの顔を見ようとしないうるのことが気になって、野球の練習を休んでまで玄関口で待ちぶせをしたのに、いざ並んで歩きだすと、気まずいちゃんもくにたえられず、またべらべらとよけいなことばかりしゃべっている自分がいた。

「この前、給食でプリンが出てから、もうずいぶんたつよな。」

「むし歯が自然に治ればなあ。」

以降

反射
背中

「山田んちの姉ちゃん、一輪車が得意なの、知ってたか。」

21/ 何を言っても、背中ごしに聞こえてくるのは、さえない足音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

22 ふいに母親の小言が頭をかすめたのは、下校中の人かげがあっちへこっちへ枝分かれして、道がすいてきたころだった。

「周也。あなた、おしゃべりなくせして、どうして会話のキャッチボールがでないの。会話っていうのは、相手の言葉を受け止めて、それをきちんと投げ返すことよ。あなたは一人でぼんぼん球を放っているだけで、それじゃ、ピンポンの壁打ちかべといっしょ。」

23 ピンポン。なんだそりゃ、とそのときは思ったけど、今、こうして壁みたいになだまりこくっている律を相手にしていると、その意味が分かるような気がしてくる。たしかに、ぼくの言葉は軽すぎる。ぼんぼん、むだに打ちすぎる。もっとじっくりねらいを定めて、いい球を投げられたなら、律だって何か返してくれるんじゃないか。

24 でも、いい球って、どんなのだろう。考えたとたん、舌が止まった。何も言えない。言葉が出ない。どうしよう。あわてるほどにぼくの口は動かなくなって、

逆に、足は律からにげるようにスピードを増していく。

25 無言のまま歩道橋をわたった先には、しかも、市立公園が待ち受けていた。道の両側から木々のこずえがたれこめた通り道。人声ひとこゑも、車の音も、工事の騒音さわごゑも聞こえない緑のトンネル。ぼくはこの静けさが大の苦手だった。

26 正確にいうと、だれかといるときにちんもくが苦手だ。たちまち、そわそわと落ち着きをなくす。何か言わなきゃってあせる。野球チームに入る前、律とよくいっしょに帰っていたころも、ぼくはこの公園を通りかかるたび、しんとした空気をかきまぜるみたいに、



ピンポン球を乱打せずにはいられなかった。律のほうはちんもくなんてちつとも気にせず、いつだって、マイペースなものだったけど。

27 そつと後ろをふり返ると、やっぱり、今日も律はおつとりと一步一步をきざんている。まぶしげに目を細め、木もれ日をふりあおぐしぐさにも、よゆうが見てとれる。ぼくにはない落ち着きつぶりに見入っていると、とつぜん、律の両目が大きく見開かれた。

28 なんだ、と思う間もなく、ぼくのほおに最初の一滴が当たった。大つぶの水玉がみるみる地面をおおっていく。天気雨——頭では分かっているながらも、ピンポン球のことばかり考えていたせいか、空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目には一しゅん、無数の白い球みたいにうつったんだ。

29 ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。「うおっ。」と思わずとび上がったら、後ろからも「何これ。」と律の声がして、ぼくたちは全身に雨を浴びながら、しばらくの間はたばたと暴れまくった。はね上がる水しぶき。びしょぬれのくつ。たがいのあわてつぶり。何もかもがむしょうにおかしくて、雨が通りすぎるなり、笑いがあふれだした。律もいっしょに笑ってくれたのがうれしくて、ぼくはことさらに大声をはり上げた。

30 はつとしたのは、爆発的な笑いが去った後、律が急にひとみを険しくしてつぶやいたときだ。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。ほんとに両方、好きなんだ。」
31 たしかに、そうだ。晴れがいいけど、こんな雨なら大かんげい。どっちも好きってこともある。心で賛成しながらも、ぼくはどっさにそれを言葉にできなかった。こんなときにかぎって口が動かず、できたのは、だまっとうなずくだけ。なのに、なぜだか律は雨上がりみたいなのがおもにどって、ぼくにうなずき返したんだ。

「行こっか。」

「うん。」

32 しめった土のおいがただようトンネルを、律と並んで再び歩きだしながら、ひよつとして——と、ぼくは思った。投げそこなった。でも、ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

